

# 芸術の授業における演習を考える

山本早里

芸術専門学群

人間総合科学研究科芸術学専攻講師

(やまもと さり／環境色彩学)

## 1. 芸術の特徴－講義と演習の連携

芸術の授業の特徴に、講義と演習・実技との有機的な連携が挙げられよう。演習の中で講義と実習を行う科目もあれば、講義科目と実技のみの科目とのセットで履修することを勧める科目もある。他の学群の授業であれば、講義と実験や、講義とフィールドワークなどの実習の関係であろうか。本稿では、芸術の講義と演習の関係を主に、その評価や発表の方法などについて述べ、最後に学生のアンケート結果を一部紹介したい。

## 2. 担当する授業の紹介

私が現在受け持っている授業を列記し、内容について簡単に述べる。

- ①色彩学：2年次 1単位 色彩学の基礎的、科学的なテーマを中心にした講義
- ②造形心理学：2～4年次 2単位 ゲシュタルト心理学を基本にしながらか知覚心理と造形作品とをつなげる説明を中心とした講義

③色彩構成演習：2・3年次 3単位 色彩学で講義したテーマを中心に2週間で1項目のペースで課題作品を制作する演習

④造形基礎演習C：1年次 2単位 芸術の全学生の必修科目 平面と立体の基礎的な技術を習得するため全員が同じ課題作品を制作する演習（宮原講師と共同指導）  
このほかに学群では卒論卒制の指導や、3年次の特別演習、総合科目、博士前期課程（修士）では、色彩計画論特講、色彩計画演習があり、博士課程（5年一貫制）では、色彩計画特講、色彩計画演習などがある。

私の授業科目では、演習の課題で取り上げるテーマを少なくとも講義で取り上げるようにしている。演習授業のねらいのひとつに、課題を通じて講義の内容を追体験したり、活用できるようにしたりすることがある。例えば「色彩対比」のテーマであれば、1学期の講義授業「色彩学」で現象をスライドで見せ、その理由を説明し、演習授業「色彩構成演習」で色彩対比を利用した作品を制作させている。演習授業の中で説明を行

い作品制作もさせ、講義科目では全く別の内容を扱っている先生もいる。講義と演習の連携が私の授業の特徴といえるかもしれない。

### 3. 演習における評価－講評

演習や実習の科目では、作品の提出日などに学生の作品に対して講評という形で評価が行われる。授業によってやり方は異なるが、概ね受講生全員の作品が一斉に並べられ、課題の確認と作品ごとにその課題に即しているか、どんな点が優れているか、劣っているか、良くするにはどうしたらよいかなどを説明する。講評会は授業時間内では終わらず、夜遅くまで行われることもある。その日は学生が最も緊張する日であり、自分の課題の講評だけでなく、他の学生の作品講評についても熱心に耳を傾けメモを取る姿が見られる。自分一人だけの講評であれば一人分しか学ぶことができないが、大勢の作品を見、それぞれの講評を聞くことができれば数倍、十数倍の勉強が一度にできるのである。大学ならではの格好の機会といえよう。

コースや分野の教員複数が集まって行う合評会もある。一人の視点に偏らない、複数の視点からの講評は、学生の多様な可能性を伸ばすことができる。学期末の成績ではこれら提出された作品および出席状況な

どを総合して評価する。ところで、私立大学では学生数が多く学生全員の講評は難しいと聞く。一人ひとり講評する、きめ細やかな指導が可能なのは筑波の優れた点である。

芸術以外の先生からは、芸術は他の分野に比べ客観的な指標がないのではないか、どのように評価するのか不思議だ、と聞かれる。長年、学生作品に限らず多くの作品を見てくればその優劣は分かってくるし、悪いところなどはすぐ目に付くものだ。特にデザインの分野では課題の目的が明確であるから講評は意外に客観的である。後で述べる学生のアンケートの回答にも見られるように、「手を抜いたところを先生はすぐ指摘する」ものなのである。確かに教員によって基準とするものに違いがあるようだが、学生たちもよく知ったもので「合う先生、合わない先生」、「どちらかというお客観的な先生」など見分けており、講評の言



講評の様子

葉そのものよりも、ある程度咀嚼して講評を受け止めているようである。

この講評のシステムが、芸術における大きな特徴の一つといえるのではないだろうか。

#### 4. 演習課題の発表

演習の授業では、授業の成果として展覧会や発表会を催すことが多い。全国的なコンペティションなどに応募することもある。展覧会や発表会は学内のギャラリースペースや学外の美術館、アートスペースを利用する。少なくとも数ヶ月前から会場の予約や展示方法の検討、PRとしてポスターやDMの作成などを学生が分担して行う。学生はこれらの活動を通して、芸術活動がただ作品を制作するだけではないことを学び、また外部と折衝することで社会との関わりも学んでいく。展覧会をすることが恒例の授業では、先輩から後輩への諸々の引継ぎが行われており、その際に学生の上下間の連携が密になり、大学や学部への帰属意識も高まるようだ。授業での講評のみよりも、このような発表の機会がある方が、学生たちの授業に対する意欲は相当に高いように思う。

これらの集大成と考えられるのが、卒業・修了制作展である。それぞれの授業で学び、培ってきた力を4年生全員および修

士2年生全員が1年かけて作品に表現するのである。県立美術館において卒業制作展が前期（美術）と後期（構成・デザイン）それぞれ1週間、修了制作展が1週間、合計3週間に渡り行われる。この間に芸術学の分野では論文発表会が行われる。展覧会場は決して狭くないはずだが、それでも一期間中に発表する学生は50人以上になり、作品のサイズは年々大きくなるので、作品が並んだ様は壮大である。全機会を通じれば延べ150人以上になる。テーマも多岐に渡り、粗削りながら学生らしく社会を鋭く見据えた視点に出会えることは卒業制作展の醍醐味ではないだろうか。優秀な作品には芸術賞や専門学群長賞、研究科長賞が贈られ、最も優秀な作品は芸術学系に収蔵されるため買い上げとなる。また全ての作品は作品集に収められる。今年度の卒業・修了制作展



卒業制作展（平成17年度卒業研究・作品集より）

は平成20年2月5日～24日、県立つくば美術館で行われる。ぜひご高覧頂きたい。

## 5. 学生の授業に対する考え－アンケート結果

このように芸術では、演習や実習の占める割合が時間的にも、また学生の意識の上でも高い。授業時間内に作品が仕上がることは稀であり、実習室の延長時間や自宅に持ち帰っての自習時間を使って完成させているのがほとんどであろう。

これら演習や実習に対する学生の反応はどうだろうか。ここに学生アンケートの結果の一部を披露する。対象は芸術専門学群構成専攻2・3年生で、科目を限定せず履修している授業全般について回答させた。

### ①演習にはどのように臨んでいますか

- ・与えられた制約の中でどれだけ自分の好きなこと、やりたいことが表現できるか考えながら臨んでいる。
- ・きちんと見てもらうことが大切だと思い、なるべく遅れたり未提出のないよう心がけている。
- ・できる限りの力を費やして締め切りを守るように心がけている。しかし凝り始めると夜中の2時3時になってしまい、最近では寝ることができずつらい。
- ・大学の課題は自分の引き出しを増やす「訓練」とか「実験」だと思って、失敗す

ることも必要だと最近は開き直るようになった。

- ・基本的により良いものを制作できるようがんばっているつもりだが、複数のものが重なると「とりあえず形にする」状態になってしまう。
- ②講評への心構えや態度を教えてください
  - ・ときに思った以上に厳しいことを言われることもあるが、その言葉から学ぶことは多く、次に良くなった作品を提出したときに受ける評価は良いことが多いので、とても勉強になると共に励みにもなる。
  - ・講評があるからこそ、作品作りにも一生懸命取り組める。
  - ・常に講評専用のノートを用意し、自分の講評だけでなく、他の人の講評も聞いている。
  - ・自分がアドバイスをもらえるものだけでも、友人の作品を見るのがとてもためになっている。他の人への講評も応用できることなどはメモを取って聞いている。
  - ・講評はいまだに緊張する。
  - ・先生の講評だけでなく、自分自身が感じた反省点なども書くようにしている。
  - ・客観的だと思える講評をより吸収しようとしている。
  - ・その先生の作品や考え方も考慮しながら講評を聞くようにしている。

③演習の成績評価はどのように捉えていますか

- ・単位が取れていれば成績はあまり気にしていない。(多数)
- ・よい成績が全てではないので「良い成績を取るための作品」にはしたくない。
- ・成績よりも自分は何を得たのかということを考えるようにしている。
- ・成績はちゃんと課題に取り組んだかどうかの現われで、一定基準ちゃんとやっていけば、それ以上の作品としての良し悪しの評価とは違うのではないかと思う。
- ・AかBかはほとんど気にならない。
- ・まじめにやっていけば評価してくれるのは有難い。
- ・悪いときは授業に臨む態度を改める機会として利用する。

## 6. 最後に

芸術の授業における演習と講義の関係や、演習での評価のあり方を探った。また学生のアンケート結果から、学生たちは真摯に演習に取り組んでおり、また講評の意義を理解していること、成績評価よりも講評をより重視している点が窺えた。今回の寄稿を機に、改めて講評の大切さや学生たちの授業に対する意気込みを知ることとなった。尚一層精進したい。